

平成 17 年度
後 期

日本語論述

13:30～15:30

解答上の注意

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題紙を開いてはならない。
- 2 問題紙は、この紙を含めて 5 枚ある。
- 3 解答用紙（25 字×40 行＝1000 字）は、2 枚ある。
- 4 解答用紙は、2 枚とも必ず提出すること。
- 5 受験番号は、すべての解答用紙の指定された個所に必ず記入すること。
- 6 選択した問題番号は、すべての解答用紙の指定された個所に必ず記入すること。
- 7 解答は、すべて解答用紙の指定された欄に記入すること。
- 8 下書き用紙は別途配布されるが、問題紙の余白を下書きに使用してもさしつかえない。
- 9 問題紙および下書き用紙は持ち帰ること。

以下の問題 1～4のうちから 1 題を選択し、1600 字～2000 字の日本語（横書き）で解答しなさい。

1

近年メディアに関わる教育や研究の場でいわゆるメディア・リテラシーの重要性が強調されるようになってきた。そのような重要性に対する認識が高まってきたことには、どのような社会的あるいは学問的背景があるのだろうか。以下の文章を参考にして、考えるところを述べなさい。

それでは、メディア・リテラシーとは何か。この言葉が意味しているのは、けっして新しいメディアを使いこなす能力ではないし、そうしたメディアを使って最新の情報をキャッチする能力でも、またそれらで情報を発信していく能力でもない。たしかに場合によっては、メディア・リテラシーの手段として、これらの能力が必要とされることもあるが、この概念のもっとも重要な点は、こうした情報処理能力にあるわけではない。メディア・リテラシーとは、私たちの身のまわりのメディアにおいて語られたり、表現されたりしている言説やイメージが、いったいどのような文脈のもとで、いかなる意図や方法によって編集されたものであるのかを批判的に読み、そこから対話的なコミュニケーションをつくりだしていく能力のことで、単なる情報発信能力や情報処理能力ではない。つまり、あらゆる情報は編集されていること、したがってあらゆる現実もまたもろもろの社会過程の中で編集され、構成されたものであるという認識が、メディア・リテラシーの出発点となる。そして、この概念は、メディア・テキストの批判的な読解と、新たな公共的コミュニケーションの創出という表裏をなす実践をつないでいく。

（吉見俊哉、2003 年『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』）

2

電子メディアの普及による情報環境の変化により、対人コミュニケーションはどのように変化しつつあるのだろうか。宮田（1988年『電子メディア社会：新しいコミュニケーション環境の社会心理』）は、電子メディアによって作り出される情報環境の変化として次の点を挙げている。それらは、(1)双方向性、(2)時間的・空間的制約からの解放、(3)個別化、(4)ネットワーク化、(5)情報の種類と量の増大、(6)擬似環境の創出、(7)情報の視覚化、である。これらのうち、特に重要と思われるものを少なくとも二点選択し、それらを基礎に、情報環境の変化が対人コミュニケーションに与えたと考えられる影響、および、電子メディアと対人コミュニケーションのあるべき関係について論じなさい。

3

地方自治ないしは国政において、議論を二分するような重要な政治的懸案が生じた場合、原則として住民（国民）投票にかけて事を決するべきであるという意見が近年盛んである。しかしそれに対しては、そのような直接民主主義的手段の多用は、現代日本の基礎的な政治制度である代議制民主主義の根幹を揺るがしかねないという反論も根強い。あなたは基本的にどちらの立場に立つか、見解を述べなさい。

その際、以下のように論を構成すること。

- (1) 該当する政治的懸案を一つ挙げる。
- (2) その懸案に関して、直接民主主義的手段を取った場合のメリット、デメリットを列挙する。
- (3) 同じくその懸案に関して、間接民主主義的手段を堅持した場合のメリット、デメリットを列挙する。
- (4) (2)、(3)を総合的に勘案して、どちらの立場を基本的に支持するか結論を述べる。

以下は「方言」は国家をこえるか」という文章の一部である。「外国人の話す日本語」と「方言」をいわゆる「日本語」との関係においてどのように捉えるべきか、この筆者の論を参考にして、あなたの意見を述べなさい。

私事にわたるが、韓国人留学生に「わたしの日本語はどの方言に聞こえますか」とたずねられたことがあった。なんともこたえられなかったが、こうした質問のしかたにおどろいたのをおぼえている。

《 中 略 》

さきの留学生の発言には、「日本語」への志向をしめす、つまり「日本語」の内部に自分のはなす「日本語」を位置づけてほしい、外国人のはなす「日本語」ではないのだ、という意識を感じとっていかざるをえない。さらにいえば、留学生自身が「方言」ということは、「真性の日本語」にはなっていない「方言」という「一般的な」位置づけを、無意識下に反映しているのではないか、とも解釈できる。そうしたところから、「方言」という単語のレトリックとして持つ側面をおもったが、そうした「同化志向」めいたものを、「日本語」が内包しているとも感じとるのである。

(安田敏朗、2003年『脱「日本語」への視座』)